



栗東のドヘツツイ～土かまど～ その特徴

旧中島家住宅のかまどは“ドヘツツイ”とよばれます。もともと、滋賀県内ではかまどのことをクド・オクドサン、ヘツツイ・ヘツツイサンなどと呼びます。ドヘツツイは、特に旧中島家住宅のような土製のかまどのことを指すものです。

ドヘツツイは、明治～大正時代にかけてレンガ製のかまどが普及する以前は、ごく一般的なかまどでした。土と藁スサを混ぜた土を積み上げて作るため、自宅のかまどを手作りすることもよく行なわれていました。

では、栗東市を含む湖南地域南部のドヘツツイはどのような特徴があるのでしょうか。

一つ目の特徴は、鍋・釜をかける口の数が多くことです。栗東市域では 5 口のものが多くみられたようです。

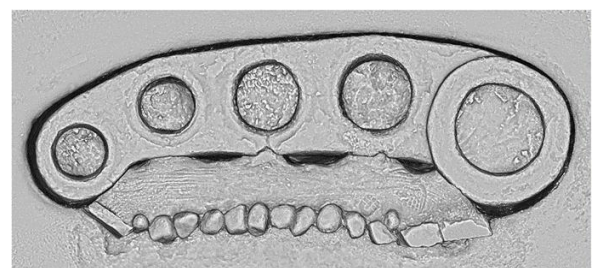


▲旧中島家住宅 初代ドヘツツイ

二つ目の特徴は、5 口すべてがつながっていることです。滋賀県内でも湖東地域では、大釜が他の小さな口と分離する場合がありますが、栗東市域で大釜が独立したかまどはみられません。

三つ目の特徴は、土間に独立して設置されていることです。滋賀県でも湖北地域では、土間とダイドコロ（室内）をまたいでかまどが設置されている事例もあります。また、湖東や湖西地域ではかまどが土間に置かれていますが、ダイドコロのカマチに接してかまどが配置されています。一方、栗東市域ではカマチなどに接することはなく、土間に独立して置かれています。

四つ目の特徴は、勾玉型をしている、ということです。この特徴は湖南地方のすべてのドヘツツイに共通する特徴ではありませんが、滋賀県内では湖南地域南部にみられる形状です。



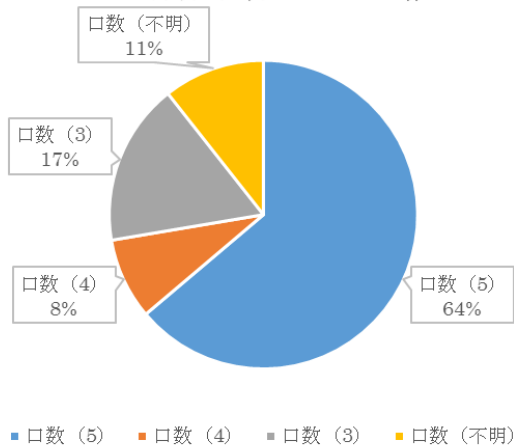
▲旧中島家住宅のかまど
上から見ると湾曲した勾玉型をしている。（計測・作図 大手前大学史学研究所 岡本篤志氏）



▲湖東地域（近江八幡市）西川家住宅（国重要文化財）のかまど。大釜は独立して置かれる。普段使うかまど 3 口は別に設置されている。



「栗東町民俗調査票」
による栗東市域かまどの口数



▲1984 年～1986 年にかけて栗東市が市域のすべての大字を対象に行なった「栗東町民俗調査票」では、かまどの口数は、5 口が 6 割と、比較的多数の口数であることが確認できる。



▲湖北地域（旧西浅井町）のかまど
土間とダイドコロをまたぎ、イロリと合体。イロリは比較的寒冷的な地域に見られ、栗東市域ではほとんどない。気温による住まい方から、こうしたかまどの設置がなされているのだろう。
（写真は『滋賀県の近世民家』（滋賀県教育委員会 1998 年）より転載）

ドヘツツイ再生レシピ①～5月23・24日ワークショップの手順～

指導：宮奥 淳司さん（宮奥左官工業 一級左官技能士）
コーディネート：岸田 知之さん

手順① かまど解体

かまどの解体は、まず塩などでかまどを清めるところから始めます。これは、栗東市域のかまどが解体される際に古くから行なわれていたことです。いよいよ解体です。解体は、ツルハシ・カケヤなどで大きく崩していきます。



手順② 土作り

ツルハシで大きく崩した土を、さらに細かくする作業です。
ハンマーで土を崩しながら、土のなかにある瓦・石などを分別します。

手順③ 土作り

ハンマーで細かくした土を、さらにきめ細かな土にするため、土をフルイにかけ、土を細かくします。
フルイ終わった土は、土嚢袋に入れておきます。（次のワークショップで使います。）

☆・・・☆・・・☆ その他のお知らせ ☆・・・☆

イラストによる記録作成

かまど再生を記録するため、毎回、作業をイラストで記録します。
イラストを作成して下さるのは、よろずでざいん 中川未子（なかがわ ひでこ）さんです。



中川 未子さん

定点カメラによる記録

かまど再生を記録するため、ドヘツツイ真上に定点カメラを設置しています。30秒ごとに撮影しています。



アミンチュてれびBBC ほっと栗東 取材

23日（土）は、かまど再生事業を紹介するテレビ取材が入ります。



断面調査

5月23日（土）は、ワークショップの作業と並行して、ドヘツツイの断面調査を行ないます。
平成26年度は、ドヘツツイを上から見た平面図、横から見た立面図を作成しましたが、今回は解体に伴って現れるドヘツツイ内部の様子を記録する調査です。
写真は、栗東市内のかまどの平面、立面を調査した際のものです。

放送時間 6月13日（土） 6月20日（日）
いずれも 18:05～18:10

☆☆☆☆録画の準備をお忘れなく!!☆☆☆☆

次回のワークショップは…6月6日（土）です。登録された方は、長靴・カッパ・帽子・お茶・必要な方は着替えをお忘れなく。どうぞ、よろしくお願ひします。また、見学は自由です。